

KNOX×日本の職人 ～こだわり抜いたものづくり～

## 藍染レザーとの出会い

古くから外国人がその美しさに魅せられ、「JAPAN BLUE」と称されてきた日本の藍色。中村千之助商店さんの開発した藍染レザーの原型と出会ったとき、これこそが日本人のアイデンティティーだと確信し、KNOXらしくアレンジする形で、革らしい風合いとエイジングが楽しめる美しい藍染めレザーのプロダクト「JAPAN BLUE」が誕生しました。

KNOXならではのこだわりや完成までの苦労などについて、藍染レザーを開発された中村千之助商店の中村高志さんとKNOX開発担当の斎藤にお話を伺ってみました。



\_KNOXで藍染レザーのプロダクトを作ろうと思ったきっかけは何ですか？

斎藤：日本独特の藍染をレザープロダクトで表現してみたいと思い、ずっと探していました。藍の世界は本物の素材、匠の技、日本製というKNOXのアイデンティティーだなと思って。そんなとき、中村千之助商店さんの藍染レザーを用いた革靴に出会ったのです。そこからKNOXらしいアレンジが始まりました。

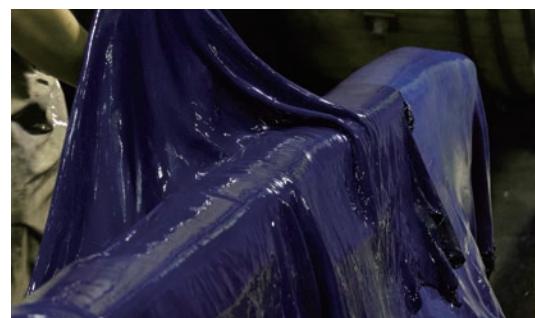
中村さん：「こういうのを作りたい」と、本物のデニムのパンツが送られてきましたよね(笑)

斎藤：デニムって使い込んでいくと縦糸の白が現れてきて、さまざまな表情を見せてくれますし、愛着も湧くので長く大切にしたくなります。タンニン鞣しにこだわっている中村さんの革を日本の縫製職人の手で形にする。そんなプロダクトを目指したいと思いました。使い込んでいくとさまざまな表情を見せるデニムのようなプロダクトを、タンニン鞣しにこだわっている中村さんの革で目指したいと思いました。

\_原型となる藍染レザーについて教えてください。  
中村さん：10年ほど前に、ある靴メーカーさんからの要望がきっかけで着手しました。難しいことは分かっていましたが、やってみたら簡単にはいかなかった。でも、難しいことだからこそ面白いですし、この苦労は使う人に伝わると思います。私のこだわりは、白タンニン鞣しで芯を白く残すことと天然藍を使うこと。白下地から染めると、使っていくうちに薄くなる部分が出てきて、経年変化が現れやすいです。キャンバスに絵を描くように、奥行きや深みのある革に仕上ります。白を残すために革を染料に漬け込む方法ではなく、革本来の製造工程である木製のドラムで染めています。

\_レザーを本藍で染める難しさはどんなところにありますか？

中村さん：人工藍であるインディゴで染めた場合、芯まできれいに染まりすぎて面白みに欠けるので、本藍にこだわっています。本藍は水に溶けないので強アルカリ液で溶かして馴染ませます。一方、タンニン鞣しをした革は酸性と相反するものなので、このままだと表面が割れて肌荒れを起こした(あかぎれのような)状態になってしまいます。



そこで、ドラムに入れたときに独自のオイルなどを加えて染めています。納得いく仕上がりになるまで、オイルの配合や注入具合の試行錯誤を繰り返しました。

\_KNOXとタッグを組み、「JAPAN BLUE」が誕生するわけですが、KNOXらしいアレンジとはどんなことでしょうか。

斎藤：日本の藍色は大体48段階の色調があるといわれています。その中でKNOXらしい藍色(ブルー)を考え、最も濃い藍を選びました。その後、2019年にそれと正反対の薄い藍、浅葱色(ライトブルー)、を追加して2色のコントラストが楽しめるラインアップになっています。また、スムースレザーは他社の製品にもあるので、マイクロチェス模様のエンボスを入れています。和の要素をささやかに取り入れつつモダンに仕上げました。

中村さん：エンボスを入れることで、藍染レザーの特徴であるムラ感に味わいが加わりましたよね。山の部分と凹んだところの陰影差によって立体感が生まれて艶も出でています。



\_藍染レザーならではの魅力は？

中村さん：他の革と違って表面の仕上げをしていないので、1枚1枚の仕上がり具合が違います。他の革以上にムラ感や色の濃さなど併まいに個性が出てくるのが藍染レザーの魅力です。

斎藤：使い込むと風合いが変わってくるので、長く付き合うほど愛着も湧いてきます。同じプロダクトでも全く異なる表情を見せるので、その違いも楽しんでいただきたいですね。

\_最後にユーザーの皆さんにメッセージをお願いします。

中村さん：過保護にしがみついて欲しくないと思います。革に現れてくる、使う方それぞれの歴史や表情を楽しんでください。

斎藤：ぜひ、日本の風土に生まれ歴史あるこの独特な藍青を、これも古くからある本革という素材で味わって欲しいですね。侘び寂びの世界にも似た微妙なニュアンスの青。一つひとつの製品はもちろん、太陽の下で見れば鮮やかに、曇り空の下では淡く落ち着く、二つとない表情豊かな「JAPAN BLUE」の魅力に浸っていただければ嬉しいです。

(左)株式会社中村千之助商店 代表取締役 中村高志さん  
1920年東京浅草で革の製造(タンナー)皮革販売業として創業。現在は、その知識を生かした厳選した皮革素材を提供している。

(右)ノックス事業部 企画部長 斎藤崇之  
KNOXプロダクトの企画・開発を担う。製品の原点である素材をこよなく愛す。日本のものづくりの魅力をもっと広めたいという想いを持ち、日々新しいプロダクトの開発に取り組んでいる。